

第4回浜松学のあり方検討委員会 議事録

- 1 日時 2026年2月17日（火）午後1時30分から
- 2 場所 浜松市役所本館5階 庁議室
- 3 出席者 委員5名
（下鶴志美委員、井熊正浩委員、小田切徳美委員、高木邦子委員及び
山名副市長（委員長））
事務局3名
（企画調整部長、企画課長、企画課長補佐）
- 4 報道関係者 2名
- 5 概要 以下のとおり

1 開会

（事務局による司会進行）

2 挨拶

（山名副市長）

改めましてこんにちは。委員の皆様方におかれましては大変お忙しい中、浜松学のあり方検討委員会にご出席をいただきましてありがとうございます。

ご案内のとおり、本委員会は、年度でいうと昨年度、一昨年12月から協議を開始いたしまして、子どもや若者の地域愛を育み、成長後も地域への関心やつながりを保って、若年層の市外への転出抑制、そして転入増加につなげるための浜松学のあり方について、ご検討をいただいているところでございます。

これまでのところ、委員の皆さまからは、地域の魅力の発見や関心を高めること、また地域とのつながりなどについて焦点を当てた意見交換の中で、専門的な知見を基に多くのご意見をいただいております。

今回は、これまでの議論や皆さまからいただきましたご意見などを踏まえ、浜松学のあり方につきまして、その目指す姿や将来像などの方向性、対象、手法、またポイントとなる観点や検討課題に加え、課題への提言を含めた報告書の最終案をお示しさせていただきます。

皆さまには、報告書の最終案や課題への提言を踏まえた、今後の浜松への期待や必要な取組などにつきまして、ご意見をいただければと思います。今回が最終の委員会となります。限られた時間ではございますが、本日も活発な意見交換をお願いできればと思います。本日も、よろしくお願いいたします。

3 議事

- (1) 浜松学のあり方検討委員会報告書（案）について
（事務局から資料1に基づき説明）

<意見交換>

（委員長（山名副市長）による司会進行）

（下鶴委員）

感想やお礼をお話しさせていただいてよろしいでしょうか。まず事務局が、毎回提出して下さる資料が大変見やすく、わかりやすく整理されていることをいつも感じておりました。また今回は、資料2について、検討委員会での発言を報告書の中にしっかりと反映させたことをわかりやすくご提示していただき、本当に大変な業務量・事務量でなかったかなと思います。お礼を申し上げたいと思います。

併せてこの資料3の教育・若者連携推進事業の創設について、本当に喜ばしいことと思っております。主な事業内容、それから役割を読ませていただきまして、このあり方検討委員会の案をさらにブラッシュアップして、より良い取組にして下さることを、期待したいと思います。

検討課題と課題への提言を読ませていただいた中で2、3点細かな提案ですが、このような取組もどうかということも、最終回ではありますけれども、今後その展開の役に立てばということでお話しさせていただきたいと思います。

まず1つ目です。23、24ページですね。小中学生が地域の想いを育むための方策の促進についてということです。もちろんここでも何回も報告させていただきましたけれども、小学校、中学校は教育課程の中で様々な取組をして、もちろん総合的な学習やキャリア教育を積んで、子どもたちに地域で学ぶ、地域を学ぶ、地域のDNAをここまで感じて学習をしていくことを一生懸命考えております。

ただ、ふと自分の反省ですけれども、小学校において、地域と考えたとき、子どもたちの居住地、通学班の通学地域を地域と捉えがちだったなと思います。もう少し広い視野に立ち、浜松全体を考えたときに、例えば、学校の授業では無理ですが、土日や長期休業を利用して、子どもたちの「浜松魅力発見パスポート」のようなものを作り、市内の文化施設や観光地、歴史上の有名な場所などを巡るスタンプラリーのようなものを、保護者を交えて子どもと一緒に自分の足でそこに訪れ、体験をし、様々なものと出会う。これがまた実体験を通すことで、もっと地域愛を育むことになるのではないかと思ったわけです。

学校教育と社会教育、もちろんこれは行政の力も必要になると思いますけれども、学びのフィールドをもう少し広げてあげると、また地域の人たちとのつながりが広まるのではないかと思った次第です。

2点目です。25ページの高校生や大学生の年代の若者が地域とつながる取組の強化についてです。先日、市立高校の政策提言発表会に行っていました。高校生が浜松市の課題を解決するためのアイデアを提言する実践発表会で、楽しい企画が多く出ていました。「音楽のまちでありながら、浜松に音楽の大学がないじゃないか。音楽の大学をつくったらどうだろう」、「館山寺をもっと活性化するには、こんな取組が必要じゃないか」などという意見です。

今回も多く企画が出ておりましたが、そこで感じたのは、やはり高校生や大学生の年代の若者が、地域で挑戦する場を設け、地域で挑戦できる場を、行政などみんながアプローチしながらつくってあげる。そういうことが必要ではないかと改めて思った次第です。それが資料3にあります今後の教育・若者連携推進事業の中にも反映されたらありがたいかなと思います。

資料26ページ、浜松に想いを持つ市外在住者との関わりを保つ方策ということで。ここは関係人口を継続的に育てる仕組みというのを考えたらどうかと思いました。例えば、これは登録制ではありませんが、「浜松ファンクラブ」というものを作り、「広報はままつ」を送る、浜松のニュース、イベントの情報の配信、ある時は季節ごとの特産品を送る。これは予算もかかることですので大変かもしれません。実は自分が大学時代、何でふるさとの気持ちをつないでいたかと考えると、ふるさを思い出すのは、やはり浜松からの便りや小包でした。そのようなもので気持ちをつなぎ、思いをつないでいくということがあるのではないかというアイデアです。この資料の中に、熊本県の「くまらバ！」もそのような実践をされておりました。そのようなことも考えられるなと思います。

最後は27ページの、地域への想いを育む上での必要な体制です。これは今回資料3で出ました「オール浜松で」という、教育・若者連携推進事業の創設は、大きな後ろ盾になるのではないかと考えています。

口早に感想だけ述べさせていただきました。以上です。よろしく申し上げます。

(山名副市長)

ありがとうございます。

全体的な感想ということでご意見をいただきましたけれども、何か事務局ありますか。

(事務局)

大変貴重なご意見をありがとうございます。

まずもっていろいろと検討をしていきたいと考えてございます。委員のおっしゃるとおりでして、自分自身も小さい頃に学区があり、学区外に出ると言われていたことから、学区外へ出るというのは冒険みたいな感じだったものです。非常に若いうちから親と一緒に浜松を回って体験するという事は、いいことなのではないかなと個人的には考えております。

もう1つ、市立高校の政策提言のお話を通じて、高校生や大学生がチャレンジできるような場をというお話もございましたが、まだ課も今度新設1年目でございますので、多分に課自体がチャレンジングな取組で、いろいろ試してやっていくところでもありますので、徐々に高校生、大学生、若者がチャレンジできるような場を提供できたらいいなと考えてございます。これも意見の中にどのような形かわからないですけども、ぜひ考慮させていただきたいと思っています。

浜松のファンクラブを作ってイベント情報をというお話も、外に出て行った人間をつなぐという意味では、重要な取組だと考えております。実は、26ページの小田切委員が政府の方に提言をしていただいた「ふるさと住民登録制度」というものがございます。これがアプリケーションを通じて、関係人口の方にいろいろ地域の情報を届ける仕組みにもなっておりますので、このようなものも利用しながら、浜松の情報を外に出て行った浜松に関わる方に、提供できたらと考えてございます。またそのような方法をいろいろと検討をしていきたいと考えております。

事務局からは以上でございます。

(下鶴委員)

ありがとうございました。

一点補足ですが、先ほど子どもたちが長期休業を利用して、浜松魅力発見パスポートみたいなもので実際に訪れたらどうだという案は、第1回の検討委員会の際に井熊委員が、「僕は『のびゆく浜松』がすべてだと思う」とおっしゃったときに、「今、後悔しているのは、あのときになぜ『のびゆく浜松』を手にして感動したときに、その場所を訪れなかったか」とおっしゃっておりました。そのような思いというのは大切であると感じ、結びつけた次第です。補足させていただきました。

ありがとうございました。

(山名副市長)

ありがとうございました。

他はいかがでしょうか。高木委員どうぞ。

(高木委員)

先ほどの事務局の説明の最後に追加された説明、親世代へのアプローチの件ですけど、ハッとさせられました。この浜松学のあり方自体は、若者を定着させるということですが、確かに親御さんの意識がその前提にあるということが、ここにはあまり入らなかったなということ、最後の最後に気づきました。

先程、小学生が学区外へ行くということも、親御さんにその気がなければ連れて行ってもらえないわけであり、浜松市に素敵な場所がたくさんあるから見せたいという親御さんの方の思いを育てることは、今回のこの報告書においては、範囲外ですよ。

委員会としてはこれでいいと思いますが、やはりそのような親の意識というものも今はまだ大事かなと思います。やがてこの若者たちが親になったときには、もちろん親として子どもに浜松の良さを伝えてくれればいいと思います。どこかの部署でやっていただけるのか、そのようなものをひとつ期待したいなという感想です。

私も資料3に触れてしまうのですが、高校生や大学生を相手にいろいろな政策提言、市立高校の場合はたぶん高校側から、総合的な探求の時間のような形でやられています、浜松市からコンペをして欲しいと思います。高校生あるいは大学生に政策提言などを考えさせ、実際にコンペがあっても、「優秀でした」という評価をされて終わりのものが、私はあまり存じ上げなかったですが、多いと聞きます。

ただ、自分の考えたものが実現する、もちろんブラッシュアップは必要だと思いますが、提案したものが本当に提案した方向に向かって進むという、そのような本当に学生たちが関わって浜松をつくっている、結果の見えるコンペができたらいいと思いました。これは意見でございます。以上です。

(山名副市長)

今高木委員からご意見のあった後段の部分について、高校生たちが実際に提案したことを、しっかりとそれを実現に向けて、あるいは自分達もそこに手を加えて参加をしていく。これは非常に大事な話だと思いますので、そのようなことも政策の中で検討できればと思っています。

他はよろしいでしょうか。

(小田切委員)

まず、資料2をまとめていただいてありがとうございました。ここで私の名前がいくつか出て来ているのは、メールで意見を改めて提出したものがあつたために頻度が高くなっております。それも含めてまとめていただいてありがとうございました。

私は報告書全般すべてにおいて全く異論はありません。このように意見を申し上げて、それに対して真摯に対応していただいたということもありますので、全く異論はないのですが、私なりの解釈をさせていただきたいなと思っています。

2つあります。1つは、浜松学というのは何であったのだろうかという、その振り返りです。最初に、この委員会が招集されたときには、社会教育なのかなというふうに認識をしたのですが、そうではなく、このようにまとめていただくと、ある種の総合的な取組であり、人と浜松市全域ないしは浜松市の1つの地域、そのつながりを強化・持続化するための取組のすべてだと解釈することができるのかなと思いました。

そのような意味では、社会教育や学校教育、あるいは文化活動促進などに限定されるものではなく、まさに総合的な取組であり、後でも発言したいと思いますが、新しい部局をいわば横断型で企画課の中につくるというのは、おそらくその辺りに意味があり、非常に重要なことと思っております。

繰り返しになりますが、人と浜松、あるいは浜松の1つに地域とのつながりという、この概念がいわば浜松学という言葉で出てきたことは大変重要です。例えば精神的つながり、先ほど「誇り」という言葉がありましたが、経済的つながりも、あるいは有権者という意味では政治的つながりも、そして生活者という意味では生活的つながりも、そのようなことを含めてそれを強化する、あるいは持続化する。しかもそれを時間と空間において、つまり将来にわたって考える。あるいは空間の意味合いにおいては、浜松市内に住んでいない人も含めて、域外の方々も含めて考える。そのような意味でも、発展的な概念なのだろうということであり、このようにまとめていただいて、私も初めて分かりました。そのような認識を申し上げてみたいと思います。

それから2点目は、研究者として申し上げますと、今回の大きな成果は13ページの浜松学の手法というかたちで、世代別に主な手法と書いてありますが、目的のための手法ということなのですが、それを特定化したというのが、これが非常に大きいなと思っています。様々な自治体などに関わりを持ってありますが、このように整理したものは、なかなかないのではないかと思います。

ここに書いてありますように、小中学校については「関心を高める」、高校生・大学生については「つながりをつくる」、社会人については「保ち続ける」という、言ってみれば、1については、おそらく教育委員会をはじめとして教育部局が大きな対象となり、2番目については、例えば市民活動を促進するような部局が1つの担当としてなり、3番目については、ここでも何回も議論したお祭りなども含めて、文化活動の促進というものが、おそらく主な主役となるのではないかと思います。

先ほどの繰り返しとなってしまいますが、世代別にこのように分けてみると、その担当する部局が市役所内の様々なところに散在している。そうであるが故にそれをつなげなくてはいけない、つまり、世代別に分けてみて、課題がこのように様々なだとい

うことに気がつく、それをつなげるためになにかしらの取組が必要で、そこが今回の新しい組織になっているというふうに理解させていただきました。

こういうまとめ方というのは他にはないということもあり、この部分をもっと強調していただいても、浜松学の成果と言いましょか、検討の成果として明らかにしたというのは、もっと誇り高く打ち出していただいてもいいのかなと思いました。

私なりの解釈を論じさせていただきました。以上です。

(山名副市長)

ありがとうございます。

小田切委員からのお話ですけれども、事務局の方でいかがですか。

(事務局)

事務局でございます。

過分なお言葉ありがとうございます。まさにこの浜松学のあり方検討委員会で議論してきたことを、全くこれまでもやっていなかったわけではなく、様々な部局がそれぞれの目的、事業に即してやってきており、ただそれが一貫した考え方に基づいて統一的に総合的に行われていたかというところ、いささか疑問は残るところもありまして、今回、新組織を4月から設置したいということで今検討を進めております。今のご指摘も踏まえて、少し報告書の中でも強調できる部分は強調した形に、最後はまとめさせていただければと思います。ありがとうございます。

(山名副市長)

他はいかがでしょうか。

(井熊委員)

うまくまとめていただいてありがとうございました。言いたい放題で、かえって申し訳なかったなと少し反省をしております。今まで3名の委員がおっしゃったとおりだというように感じております。

感想になりますが、資料3が次のステップだと理解をしております。今、小田切委員からお話があった資料1の13ページのところ、主な手法がいろいろ明確になってまいりましたので、あとは具体的に実行に移すところが非常に大事なと思います。是非ここでの議論を活かしていただき、実行に移していただき、おかしいと思ったらすぐ変えていただければいいと思います。朝令暮改で結構じゃないかなと思います。ぜひ実行に移して成果を生み出していきたいと思います。

希望でございます。ありがとうございました。

(山名副市長)

ありがとうございます。

委員の皆さんからご意見をいただきました。他はよろしいでしょうか。まず報告書につきましてということですが、よろしいでしょうか。

今いただきましたご意見ですと、報告書について、少し修正など手を加えるところが、今のご意見の中でそれぞれあったと思いますので、それを事務局の方でとりまとめただけですか。

(事務局)

はい。また事務局でとりまとめさせていただきます、委員の皆さまにお示しさせていただきます。

(山名副市長)

その修正案を、成案として委員の皆さまにまたお示しをさせていただき、その最終版を成果としていくことでよろしいでしょうか。そのようにさせていただきたいと思います。

それからもう1点、先ほどもご意見の中に触れたところもありますが、資料3の教育・若者連携推進事業の創設につきましてご意見もいただきました方もいらっしゃいましたが、これについてご質問等はよろしいでしょうか。

(小田切委員)

ここの部分については、先ほど意見を控えたものですから申し上げますと、まさにこのように連携組織と言いましょか、つくっていただくというのは大変重要です。今までの各地での経験から、いくつかの勘所がございますので、ご紹介させていただきたいと思います。

事務局で十分把握されていると思いますが、この種のことは、金沢市が大変力を入れております。金沢市では、学生と地域連携のプラットフォームをつくっております。そして、来年度には、石川県庁がサテライトキャンパス推進事業を立ち上げ、大学のフィールドワークなどを呼び込んで、そのコーディネートを県が実施するという事業を行います。そのような具体的な事業などが始まるようです。

また、今から十数年前ですが、域学連携という言葉でこの種のことが推進されたことが一時的にありました。地域の域と学。産学連携ではなく、これからは域学連携の時代なのだとのことでした。

そのときに私は、「大学の不安、地域の不満」というエッセーを書いたことがありまして、その域学連携をやっていると、大学は大学サイドで不安が出てきて、地域は地域サイドで不満が出てきます。それはどういうことなのかというと、地域の不満の方

がわかりやすいのですが、大学は調査ばかりしている、資料ばかり要求する、いつまでも報告会もしない、スピード感が全然違うなど、特に地域の産業界からは明らかにそのような不満が出てきます。

それからもう1つ、大学の方は地域から何でもかんでも求められるという不安です。地域とつき合うと全然専門的ではないことも聞かれるという不安があり、どこまでお付き合いしていいのかわからないという、そんな不安が蔓延する状況があり、これは先ほど申し上げたように、大学の不安、地域の不満、両者がすれ違っているという、そのようなことをエッセーに書きました。

これは我々の原体験でもあり、域学連携について調査をした1つの結果でもありますが、一言でいうとコミュニケーション不足です。地域の方は、大学に頼めばすべての問題が解決するという、大学を救世主のように考えている。大学の方は、自分たちの時間軸でやればいいという思い込みがあり、スピード感到に全く付いていけないという、そのような少しわがままなことがありました。

そのような意味では、非常に素朴な解決策しかないのですが、両者がコミュニケーションをとる。要するに大学をゲストにしない、お客さんにしないという、そこが非常にポイントなのだと思います。風通しがよい連携をつくる。そのような経験がありますので、あえて申し上げておきたいと思います。ぜひコミュニケーションをとれるような、大学との関係をつくり上げていただきたいなと思います。

(山名副市長)

ありがとうございます。

まさに浜松市がこれから取り組もうとするところでございますので、本当に大変貴重なご意見をありがとうございます。

(井熊委員)

小田切先生、今のお話を伺っていて、資料3(2)の大学への施策の④首都圏大学との連携に向けた研究というのは、まさしく今おっしゃったお客さんになってしまうような気がしますけれども、いかがですか。

(小田切委員)

おっしゃるとおりです。この種のもの、小さく産んで大きく育てるというのがよく、やはり地域内で先発的にやって、そこで経験を積み込んで、先ほど申し上げたように風通しのいい状況をつくることを経験した後、場合によったら、理解ある首都圏の大学、実態がよくわかっている大学等に限定して広げていくというのが良いのかと思います。

(山名副市長)

ありがとうございます。

(高木委員)

今の話と違う話をしてもいいですか。

(山名副市長)

どうぞ。

(高木委員)

浜松駅の南側に某大学がキャンパスを建てられますね。これは、何と言いますか、駅周りの関係人口ですかね、いわゆる、駅周りがにぎやかになるひとつチャンスなのではないかと思っております。それこそサザンクロス商店街の一部を学生のアイデアでリノベーションして、何ならそこに学生がシェアハウスとして住み込みながら、月に1回程度、地域の人と何かイベントをやるなど、すごく妄想が広がります。

教育若者連携について、行政が出てくると学生が思っていることのマッチングは、意外にいくら伝えても伝わりきらないところがあります。そのため、伝える媒介として大学を巻き込むというのは、ひとつすごくいいアイデアだなと思います。いろんなイベントについて、学生に届いていなかったものが上手に届くようになると、学生たちの活躍の場も増えます。今私が思っているのは、駅の周りの活性化ですが、浜松市全体がにぎやかになっていくといいと思いました。

先ほど小田切先生がおっしゃったように、思惑やそれぞれ求めているものが違うことで、すれ違ってしまおうというのは確かに今まで私も、全然違うことですがけれども、こちらの思いと向こうの思いが違うという経験をたくさんしてきました。

そのようなときに、違うからやめようというのではなく、そのすり合わせを行うことに、最初はすごく労力を割かれるのでないだろうかということは考えに至りました。すみません、ちゃんとした意見になっていません。以上です。

(山名副市長)

ありがとうございます。

駅南の某大学のお話をいただきましたけど、文芸大さんもぜひ一緒になってやっていただきたいと思います。

(高木委員)

ぜひお願いします。

(山名副市長)

よろしくお願ひします。

他はよろしいでしょうか。

資料3につきましては、今のご意見ということにさせていただきます。

今まで報告書、教育・若者連携推進事業の創設につきまして、ご意見をいただきました。先ほど申し上げましたように、この検討委員会は今回が最終回になります。全般を振り返りまして、全体に対して何かご意見等いただければと思います。これから我々としても具体的に組織を作り、それだけではございませんが、具体的な事業を進めていきます。これまでの検討委員会での議論を踏まえて、感想もいただきましたけれども、そのような感想あるいは市への期待、もう少しこのような部分が足りないのではないかというご意見など、最終回でございますので、もしあればお願いをしたいと思ひます。いかがでしょうか。

(小田切委員)

先ほど、浜松学というのは人と浜松とのつながりだと、そのように申し上げました。実はこのように考えたヒントがあります。山形県西川町に「つなぐ課」という課が新設されております。小さな自治体ということもあり、課の名称や再編が比較的自由にできているということもあり、西川町ではいくつかの課があるのですが、「かせぐ課」と「つなぐ課」という課が新設されております、その「つなぐ課」というのは、移住、関係人口、地域の方々の定住、これをシームレスにつないでいくという考え方なのです。そこが1つのヒントとして、あのように申し上げました。

浜松の場合はもう少し幅広く、そこに教育も入り、特に「学」ということを名乗ったということもあり、学校教育も社会教育も入ってくる。そのように考えると、人と地域とのつながりという、何と申すのでしょうか、公共政策としての新しい領域が生まれ始めている、そのような認識を持った方がよさそうに思ひます。

「つなぐ課」のような課をつくる必要は無いとしても、いささか極端に言えば、農業政策や福祉政策と同じようなボリュームで、人と地域をつなぐという新しい公共政策の領域が生まれている。

これは先ほど部長がおっしゃったように、既に一つ一つある政策課題なのですが、それをまさに市役所レベルでつなぐことによって、そのような新しい領域ができると考えたときに、今回は企画課内に新しい担当課長を置くということなのですが、いささか極端に言えば、10年後には「人と地域とのつながり部」のような部が、名称はともかくとして、生まれてもおかしくないのかなと思ひます。

そのような意味では、今回のチャレンジというのは、実は将来的に見ると市役所組織の、あるいは公共政策分野についての新しい問題提起でもあるという理解をしてもいいのではないかなと思ひました。

(山名副市長)

ありがとうございます。

確かに今まで気が付かず、あえて具体的な取組をしていなくても、いろんなところで行っていたことを、あえてここで具体的にとりまとめを行う。小田切委員からご指摘をいただいたようなところを、我々もより発展させていけば、まさに単なる課だけではなくて、もっと大きな組織として取り組むような大きな課題だと思います。ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。高木委員どうぞ。

(高木委員)

私先ほど皆さんへの感謝を言わなくて、お三方がおっしゃっていたのに、毎回本当にありがとうございました。

私は行政・市政に関することは全く素人なので、全く門外漢なことを言っていたのかなと思いながら、毎回恥ずかしい思いをしていたのですが、うまいこと顔を立てていただき、いろいろ入れ込んでいただいて本当に感謝しています。

先ほど申し上げた、保護者をもう少し巻き込みたいという話と、あとは、もちろん中には入っていますが、企業をぜひ巻き込んでいただきたいとすごく思います。先ほど、コンペの話をしました。何かを実現するときにはスポンサーが必要です。そのような企業から出て来たものを、浜松市が高校生・大学生にこのようなアイデアを募集していると、今までは大学、高校が単体で行っていたものを、浜松市の要請に 대응して行ってみるといった形にしていただくと、たぶん学生たちの満足度が違うのではないかとすごく感じますので、ぜひお願いしたいと思います。以上です。

(山名副市長)

ありがとうございます。

(下鶴委員)

また感想になるかもしれませんが、本当に浜松学のあり方検討委員会に出させていただいて、私自身、浜松が今どのようなことをしているのかということに、すごく関心を持ちました。新聞を見て、市長さんが高校生を前に浜松の魅力について様々な角度からお話しされていること、また、議員さんを交えて高校生がやりとりをしていること、地域ではまちの活性化を考え、様々な取組がされていること。ただ、さきほど高木委員がおっしゃいましたように、1つにまとめてオール浜松で取り組むという形にすれば、もっとうねりができるのではないかと考えました。

この浜松学の対象とする年代は、先ほど言いましたけれども、地域のことを理解し始める小学生から、人生の様々な節目に直面する30代までを想定するということが対

象ではあるけれども、本当に大切なのは、この対象者に接する大人や様々な方々が、浜松をどれだけ愛して、この浜松の魅力を伝えようとしていく、残していこうとする、その熱意というのが本当は大切なのではないかなということを感じました。私もそのような一員で、お手伝いできればと思っております。

本当にありがとうございました。いい勉強をさせていただきました。

(山名副市長)

ありがとうございます。

(井熊委員)

自分の体験談を少しご紹介したいと思います。今から20年ほど前になりますが、静岡県産材の依頼で県産材の活用推進委員に任命され、会議に数回参加させていただいたなかで、天竜の春野町だったと思いますが、チェーンソーで木を切る現場に連れて行かれて、その木を切ると木がバサッと、樹齢どれくらいですかね、40年、50年ぐらいの杉の木だったのですが、それを目の前で倒して、その迫力に驚いて、切った切り株に手をかざすと、水がどんどん出てくるのが分かり、いや、すごいなと思いました。いわゆる天竜美林の特性をそこで現場の人に説明をしてもらって、まんまとやられたなと思いますが、やはり天竜の木で家を建てました。県産材の補助金が出る前でした。

下鶴委員が先ほどおっしゃった、体験する、体感するということがいかに重要か、自分もそのような経験をしましたので思いました。だから子どもから大人まで浜松を体感する、体験する、そのような場をぜひたくさんつくっていただく、実行に移していただきたいなと思います。考え方は素晴らしいと思います。あとは実行に。ぜひよろしく願いいたします。

(山名副市長)

ありがとうございます。

皆さんからご意見をいただきました。よろしいでしょうか。

それでは、今皆さんから貴重なご意見をいただきましたので、報告書だけではなく、これから進めていく我々の政策の中で、そのようなご意見をぜひ活かしていきたいと思います。ありがとうございました。

今回で本検討委員会、先ほど申し上げましたが最終回ということでございますので、私から最後のご挨拶をさせていただきたいと思っております。

委員の皆様方には、概ね一年余にわたりまして、浜松学のあり方について活発なご議論をいただきまして、本当に感謝を申し上げます。ありがとうございます。

おかげをもちまして、皆さまからいただきましたご意見を踏まえ、なんとか報告書を、多少のまだ手直しが必要にはなりますが、まとめていくことができます。ありがとうございます。

議論を通じまして、将来を担う子どもたち、また若者に地域への想いをしっかりと育んでいくということは、短い時間でやれることではなくて、長期的に、あるいは継続的な取組というのが本当に必要になるのではないかなと思います。また行政だけでは実現できないとも思っております。行政だけで実現するというのは大変難しいことであると、今改めて認識をしたところでございます。

検討委員会は本日をもって終了いたしますけれども、これから報告書にまとめられた提言、これを委員の皆さんからいただきましたけれども、市民、団体、学校、企業の皆さんと一緒に、オール浜松で進めていくということが大事になってまいります。皆さんにおかれましても、それぞれのお立場で引き続きのご理解、ご支援をよろしくをお願いをしたいと思います。本当にこれまでの期間ありがとうございました。

それでは、進行を事務局にお願いしたいと思います。

4 閉会

(事務局)

ありがとうございました。

本日をもって、検討委員会は終了となります。最終的な報告書につきましては、改めてご提示をさせていただきます。皆さまから積極的なご意見、非常に貴重なご意見を賜りまして、本当にありがとうございました。

では、これをもって、第4回浜松学のあり方検討委員会を閉会いたします。

ありがとうございました。

(終了)